二〇一九年度 千葉県公立高校入試問題（前期）

五〇分
一〇〇点

一

（注）解答する際に字数制限がある場合には、句読点や「　」などの符号も字数に数えること。

これから、上田中学校の学習発表会に向けて、竹原さん、波野さん、森さんの班で「社会で活躍しているロボット」について調べてきたことをもとに話し合いをしている場面と、それに関連した問いを四問放送します。話し合いは次の〈資料〉のように、班員が事前に調べたことがらを書いたカードを持ち寄って、机の上に並べたところから始まります。〈資料〉を見ながら放送を聞き、それぞれの問いに答えなさい。

（放送が流れます。）

〈資料〉「社会で活躍しているロボット」

〔調べてきたことを書いたカード〕

㋐ バーコードを読み取って倉庫内を動き回り，商品の出し入れを行うロボット

㋑ 人がたずねると行きたい場所や欲しい商品を案内するロボット

㋒ 作物の収穫や農薬の散布などを自分で判断して行うロボット

㋓ 医師の操作に合わせて細かな手術をするアーム型ロボット

㋔ 会話やゲームの相手などをして一時的な子どもの見守りをするロボット

製品の製造，検査など，流れ作業の一部分をになうロボット

人の動作を助けるパワードスーツ

(1)　（問いを放送します。）

(2)　（問いを放送します。）

［選択肢］

ア　カードに書いた情報を集めることで、多数決の決め手としている。

イ　意見を書いたカードを読み合わせて、互いの立場を把握している。

ウ　発言を黒板に書く手間を省き、早く結論を導き出そうとしている。

エ　集めた情報を視覚化し、比較検討しながら話し合いを進めている。

(3)　（問いを放送します。）

［選択肢］

ア　話題に対して異なる視点を示し、他の側面からも考えるよう促す効果。

イ　相手の発言の矛盾を指摘して、自分の考えの正しさを強調する効果。

ウ　意見交換があまり活発でないので、話題を変えて気分を一新する効果。

エ　発表を聞く人の立場を想定して発言し、主張の根拠を確認させる効果。

(4)（問いを放送します。）

［選択肢］

ア　ロボットと人間とではどれくらい仕事の量に差があるかについて。

イ　機能の進歩にともなってロボットの形態が変化したことについて。

ウ　これからの社会で人間がロボットに任せていきたい役割について。

エ　人の日常生活に安易にロボットを導入することの危険性について。

二　次の(1)～(4)の——の漢字の読みを、ひらがなで書きなさい。

(1) 旧友と再会し、話が弾む。
(2) 励まされて勇気が湧く。
(3) 害虫を駆除する。
(4) 古い習慣を踏襲する。

三　次の(1)～(5)の——のカタカナの部分を漢字に直して、楷書で書きなさい。

(1) 麦わらをアんで作った帽子。
(2) 一歩シリゾいて道をあける。
(3) 百年を超えるわが校のエンカクを紹介する。
(4) 業務にシショウをきたす。
(5) 試合でキシカイセイのシュートを決めた。

二(1)	二(2)	二(3)	二(4)	三(1)	三(2)	三(3)	三(4)	三(5)
む	く			んで	いて			

四

次の文章は、若草中学校の新聞部の生徒が学校新聞のあるコーナーに掲載するために書いた原稿の下書きです。これを読み、あとの(1)～(4)の問いに答えなさい。

> 今回お話をうかがったのは、社会科の中村先生です。
> 中村先生は、わが中学校の「もの知り博士」として知られている方です。先生は、大学時代に世界史を学ばれました。先生はこの頃から読書がお好きで、部屋に①置いてあるものの多くは本だったそうです。ご自分の専門に加え、中国文学に関わる書物も数多くA読んでいて、多様な話題を取り入れた授業をしてくださいます。
> 先生の好きな言葉は、「B少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽んずべからず。」だそうです。若草中学校のみなさんに、「C時間の流れは、みんなが思っているほど②遅くない。豊かな人生を送るために、③学校にいる間、いろいろなことに④挑戦してみる姿勢を大事にしてほしい。」とおっしゃっていました。

(1) 文章中の①～④の四つの～～～のうち、**二つの文節の関係が他と異なるもの**が一つある。その符号を書きなさい。

(2) 文章中のA読んでを適切な尊敬語に直し、一文節で書きなさい。

(3) 文章中にB少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽んずべからず。とあるが、こう読めるように、次の「少年易ク老イ学難シ成リ、一寸ノ光陰不可カラ軽ンズ。」に返り点をつけなさい。

少年易ク老イ学難シ成リ、一寸ノ光陰不可カラ軽ンズ。

(4) 文章中にあるC間の文字を次のように行書で書くとき、行書の特徴の一つである点画の省略がみられます。このように点画を省略している行書の漢字をあとのア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

間

ア 巨
イ 光
ウ 夏
エ 校

五　次の文章を読み、あとの(1)～(6)の問いに答えなさい。

言葉は、「言の葉」というように、薬草ととても性質が似ています。それを見、それが何であるかを知るのも重要ですが、本当に必要な場合はそれを摂（と）りいれることが重要です。

詩も同じではないでしょうか。単に読むだけでなく、それを深く味わうためにいくつかのことをおすすめしたいと思うのです。

「よむ」という言葉には、三つの漢字を当てることができます。

たとえば歌の場合は次のようになります。

歌を「詠む」
歌を「読む」
歌を「誦む」

「詠む」は　A　ことです。「読む」は、紙に書かれた、あるいは印刷されたものを味わうこと、そして「誦む」は、暗誦（あんしょう）という言葉があるように　B　ことです。

歌を「詠む」とき人は紙や短冊（たんざく）にそれを書き記します。歌を「詠む」ことは「書く」ことでもあります。

私たちは詩集を「読む」ことができます。しかし、詩集は、記された文字を追うだけでなく、その言葉を口に出して「誦む」こともできるのです。

皆さんに、詩を読み、味わうだけでなく、書くことをぜひ、おすすめしたいと思います。書くことをおすすめするのは、書くことによって人ははじめて自分が何を考えていたかを知ることが少なくないからです。書いているときに、自分の予想を上まわるような言葉が出てくる、自分では思いもしなかったような言葉が自分の筆から現れてくる、そういう経験は、皆さんにも一度ならず、あるのではないでしょうか。

人は、自らの考えていることを書くこともできます。しかし、書くことによってはじめて自分が何を感じ、［C］を実感することもできる。そのなかでも詩を書くという行為は、心のありようを直（じか）に感じられる営みであるように思われます。

詩は、うまく書く必要はありません。詩は、上手下手の世界を超えたところに私たちを導いてくれます。

むしろ、詩はうまく書こうとさえしなければ、どこかにその人の切実なこころのありようが刻まれ、読む人のこころを動かすように思われます。

D人が「うまい」と感じる文章は、つねに誰かが書いたものに似ています。私たちがつむがなくてはならないのは、誰かに似た、誰かが代わりに書けるようなものではありません。E今、ここで、自分にしか書くことのできない何かなのではないでしょうか。

また、人は、誰かに読まれることがなくても書くことができます。なぜなら、自分自身が最初の、そしてもっとも重要な読者になるからです。

ぜひ、詩を書いてみてください。もし、自身の作品をつむぐのが難しいと感じられた方は、自分が好きな詩をノートに書き写すだけでも構いません。それを繰り返しているうちに人は、先人の言葉に導かれ、必ず何かを書き始めます。

「読む」と「書く」という二つの行為は、現代人が感じているよりもずっと近いものではないでしょうか。むしろ、それは二つの別々の行為であるよりも、あることを分かろうとするときに私たちが試みる行為の二つの側面なのではないでしょうか。それはF呼吸のようなものであるようにも感じられます。

詩を読む、これは空気を吸うことです。詩を書く、これは吐くことです。これを繰り返しながら、ときに作品を声に出して読む。すると詩の世界の感じられ方は、本を目で読んでいるだけのときとはまるで変わったものになります。

（若松英輔（わかまつえいすけ）「ＮＨＫカルチャーラジオ文学の世界　詩と出会う　詩と生きる」より。なお、一部表記を省略したところがある。）

(1) 文章中の A 、 B に入る言葉として最も適当なものを、次のア～オのうちからそれぞれ一つずつ選び、その符号を書きなさい。

ア 歌の内容を推測する　イ 歌を作る　ウ 記された文字を目で追う　エ 歌を暗記する　オ 声に出して読み上げる

A [ ]　B [ ]

(2) 文章中の C に入る言葉を、文章中から**八字**で**抜き出して**書きなさい。

[ ][ ][ ][ ][ ][ ][ ][ ]

(3) 文章中のD<u>人が「うまい」と感じる文章</u>について、筆者はなぜ「うまい」に「　」をつけているか。その理由として考えられる最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 文章のうまさにはいくつかの段階があり、その中で最も優れた段階であることを明らかにしたいから。
イ 上手な文章の基準は、文章を読むすべての読み手にとって同じようなものであることを示したいから。
ウ そもそも文章は、誰かに読まれることを意識して書くのが何より大切だということを強調したいから。
エ 筆者が価値を置く文章は、一般的に上手だと感じられる文章と異なることを伝えようとしているから。

[ ]

(4) 文章中で筆者が、E今、ここで、自分にしか書くことのできない何かをつむぐべきだと考える理由を説明した次の文の［　］に入る言葉を、文章中から**十一字**で**抜き出して**書きなさい。

書くという行為を通して表された［　］こそが、読む人を感動させるから。

(5) 文章中のF呼吸のようなものについて説明した次の文の［　］に入る言葉を、**三十五字以内**で書きなさい。ただし、「呼吸における……のように……である。」という形で書くこと。

読むことと書くことは、［　］

(6) この文章の内容を説明したものとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 「読む」とは詩を味わうことであるが、詩のこころを読めるようになるためには、「書く」行為を自然のままにすることが大切である。

イ 「詠む」と「読む」とが歌の世界において繰り返されるように、詩の世界でも「読む」と「書く」とが繰り返されるべき行為である。

ウ 「よむ」ことは「口に出す」ことでもあるので、詩の世界も目で読むよりも、声で表現する方が詩をよりよく感じられるようになる。

エ 「よむ」に三つの意味があるように、詩も読むことと書くことを繰り返し、ときに声に出して読むことで、深く感じることができる。

六

次の文章を読み、あとの(1)～(6)の問いに答えなさい。

> 市兵衛（いちべえ）が江戸駒込（こまごめ）に開いた菓子舗「照月堂（しょうげつどう）」は、今では息子の久兵衛（きゅうべえ）、おまさ夫妻が営んでいる。瀬尾（せのお）なつめは、夫妻の子郁太郎（いくたろう）・亀次郎（かめじろう）の子守役として働きながら、菓子職人になることを夢見ている少女である。ある日、おまさの顔色がよくないことを案じ、自分の住まいで作った棗（なつめ）の蜜漬けを持って来たなつめは、これでお菓子を作れないかと思いついた。次の文章は、それから二日ほど後の場面を描いたものである。

棗(注1)の実で作った煉(注2)（ね）り切りは、甘酸（あまず）っぱくさわやかな香りが口中に広がる絶品だった。

「なつめちゃんのお菓子、おいしい！」

亀次郎がはしゃいだ声をあげ、郁太郎も亀次郎相手に「うん、おいしい！」と笑顔を向けている。

「これはなかなか」

と、市兵衛と太助（たすけ）が顔を見合わせ、こちらも頬を緩めていた。

安吉（やすきち）は感慨深そうな様子で、菓子を口に含み、うっとりとした顔つきで味わっている。

そして、おまさは――。

「おかみさん」

なつめが声をかけた時、返事が一瞬遅れた。

暗赤色の実を一つ食べ終わったおまさは、自分でも気づかぬうちに目を潤ませていたようだ。

「えっ、ああ。なつめさん」

はっと我に返ったおまさは、目立たぬふうに袖口を目頭に当てた後、なつめに目を向けた。

「旦那さんはおかみさんのために、このお菓子を作ったのですよね」

久兵衛は絶対にそうは言わないだろうし、認めることもないだろうが、それに違いない。

いつも家を守ってくれるおまさのために、無理をしてつい働き過ぎてしまう女房（にょうぼう）をいたわるために――。

ふだんはあまり顔にも言葉でも感謝を示さない久兵衛が体によい棗の実を使って、菓子を作り上げたのだ。

なつめの声が聞こえていたはずであろうに、久兵衛はＡ無視を決め込んでいる。

一方、なつめの言葉を耳にした亀次郎は、

「それじゃあ、これはなつめちゃんのお菓子じゃなくて、おっ母さんのお菓子なの？」

と、首をかしげながら、母となつめを交互に見つめてくる。

「そうそう――」

その時、菓子を食べ終わって至福の表情を浮かべていた番頭（注3）の太助が、ふと思い出したように切り出した。

「先日、季節の変わり目はどうも調子が悪い、とおっしゃっていたお客さまがいらっしゃいました。おかみさんに食べ続けていただきたいのはもちろんですが、そういったお客さまにも、ぜひともこの菓子を味わっていただきたい。いかがでしょうか」

「それはぜひともそうするべきだね」

市兵衛が太助の後押しをする。久兵衛は皆の反応にゆっくりとうなずいた。

「それでは、旦那さん。どうかこの菓子に菓銘（注4）をおつけください」

「ふむ」

太助から頼まれ、久兵衛は皿を置いて腕組みをする。

「菓銘はふつう作り手がつけるものだ。だが、これは、俺一人で作り上げたわけでもねえ。餡（あん）と混ぜるのを試したのは安吉だし、棗の菓子を作ることを最初に言い出したのは、なつめだそうだ」

そう言った後、Ｂ久兵衛は安吉となつめにじっと目を向けた。

「この実は、なつめが持ってきてくれたものだと聞くし、ここは菓銘をつける役目をなつめに譲ろうと思うが、安吉、お前はどうだ？」

「へえ、そりゃあもう――」

元より菓銘をつけるなど考えてみたこともない安吉は、一も二もなく承知する。

「ですが……」

一方、C <u>なつめの方は困惑していた。</u>

菓銘にそんな重々しい意味があったとは知らなかった。今改めて久兵衛からそのことを聞くと、恥ずかしさが込み上げてくる。自分は〈望月（もちづき）のうさぎ〉、〈辰（たつ）焼き〉などの菓銘をつけ、半ば得意になってもいたのだ。

「私と安吉が言うんだからかまわん。それに、お前には菓銘の才がある」

久兵衛はいつになく穏やかな声でなつめに言った。それでも、なつめがなおも躊躇（ちゅうちょ）していると、市兵衛と目が合った。

「心配要らない。なつめさんはうちの店の福の神なんだからね」

「なつめさん、あたしからもお頼みします」

棗の実を誰より食べてもらいたかったおまさから、最後にそう言われ、頭を下げられた時、なつめの心の中は感謝の気持ちでいっぱいになった。

この店に入れてもらえてよかった、まずは子守の女中から頑張っていこう――と気持ちを新たにしたその時、ある一つの言葉が頭に浮かんだ。

「このお菓子は何より、おかみさんがお健やかであることを祈って作られたものだと思います」

自分が菓子を作ってほしいと言ったのも、安吉が拙い技で必死に作ろうとしたのも、おまさに元気でいてほしいという願いがあればこそだ。そして、久兵衛にとって、その思いは何よりも切実だったはず。

そうした思いを胸に、なつめは一度目を閉じ、深呼吸をした。それから、ゆっくり目を開けると、なつめは久兵衛に向かって背筋を伸ばし、

「〈養生（ようじょう）なつめ〉ではいかがでしょうか」

ゆっくりと告げた。[D]が入っているのが少し照れくさいが、材料だけでなく、菓子の形状に棗の花と実を使った久兵衛の思いも名前に入れたい。

「養生なつめ……」

郁太郎と亀次郎が同時に口に出して呟(つぶや)く。

「悪くねえ！」

叫ぶように言ったのは、安吉だった。市兵衛や久兵衛の前だったということに気づいて、「すいません」と小声で謝ってから、

「悪くない……ですよね、親方？」

と、顔色をうかがうようにして問い直す。

「ああ、いい菓銘だ」

久兵衛は噛(か)み締めるような口ぶりで言った後、お前はどう思うか、というような目をおまさに向けた。

「本当にぴったりの名前ですねえ」

おまさはしみじみとした声で、すぐにそう答えた後、

「あたしだけでなく、うちの店に来てくれるお客さまが、このお菓子で健やかになっていただければ、こんなにいいことはありませんよ」

と、嬉(うれ)しそうに付け加えた。E<u>その目は再び潤みを帯びてきたようであった。</u>

（篠(しの)　綾子(あやこ)「菊のきせ綿(わた)　江戸菓子舗(かしほ)　照月堂(しょうげつどう)」より）

（注1）棗の実＝中国から西アジアを原産とするナツメの木の果実。甘く煮たり乾燥させたりして食用とする。漢方薬ともする。

（注2）煉り切り＝和菓子の一種。白あんに色をつけたり他の食材を加えたりして調整し練ったものを用いた生菓子。

（注3）番頭＝店の経営などを仕切る使用人。

（注4）菓銘＝菓子に付けられる名前。

(1) 文章中にA無視を決め込んでいるとあるが、この表現から読み取れる久兵衛の気持ちとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　使用人であるなつめの出過ぎた言いように腹を立てている。
イ　家族に対する情愛を表すことは気恥ずかしいと思っている。
ウ　自分の菓子に余計な評価をされるのを不愉快に思っている。
エ　目立たぬように涙をぬぐうおまさをいたわろうとしている。

(2) 文章中にB久兵衛は安吉となつめにじっと目を向けたとあるが、このときの久兵衛の気持ちの説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　新しい菓子に名前をつける役目はなつめが一番ふさわしいのではないかと考えて、安吉にも同意を求めようと思案している。
イ　どんな菓銘をつけるかによって、なつめの菓子職人になりたいという夢が本気かどうかを試せるのではないかと考えている。
ウ　珍しい材料を菓子にすることを考えたなつめなら、お客の評判になるような目新しい菓銘を思いつくだろうと期待している。
エ　店主である自分が新しい菓子に名をつける大事な役目を弟子の安吉やなつめに譲ることを、市兵衛がどう思うか案じている。

(3) 文章中にCなつめの方は困惑していたとあるが、その理由として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 久兵衛から名付けの才能を認められたことは嬉しいが、自分がいまだに菓子作りを教わっていないことにあせりを感じたから。
イ これまで菓銘をつけさせてもらって得意になっていた自分のあさはかさを皆に見すかされ、恥ずかしい思いがこみあげたから。
ウ 指名は光栄だが、作り手を差し置いて自分が菓銘をつけるのは身の程を超えることだと分かり、ためらう気持ちが生じたから。
エ 店の福の神などとおだてられ、急に人々の期待が大きくなってきたので、自分が軽々しく名をつけることに気後れがしたから。

(4) 文章中の D に入る言葉を**五字**で書きなさい。ただし、次の［語群］のうちから**二つ**選び、それらを使って書くこと。

［語群］ 女房　名前　顔色　感謝　自分　得意

(5)　文章中の安吉について述べた次の説明文を完成させなさい。ただし、［Ⅰ］は、あとのア～エのうちから最も適当なものを一つ選び、その符号を書き、［Ⅱ］は文章中から**十字**で**抜き出して**書くこと。

安吉は思ったことをすぐ口に出してしまう［Ⅰ］であるが、おまさを案じる思いをなつめと共有し、すぐさま棗の実を使った餡を作ろうとするなど、菓子作りに貢献した。安吉が餡の味わいに自分の活躍のあとを確かめ、満足感に浸っている様子は、文章中の「［Ⅱ］」という描写に表れている。

ア　おひとよし　　イ　お調子者　　ウ　頑固者　　エ　小心者

Ⅰ［　］
Ⅱ［　　　　　　　　　　］

(6)　文章中にEその目は再び潤みを帯びてきたようであったとあるが、おまさの涙の意味をまとめた次の文の［　］に入る言葉を、文章中の言葉を使って、**十字以上、二十字以内**で書きなさい。

店の者たちの、自分に向けられた思いが一つの菓子として実を結んだことを嬉しく思うとともに、これから［　］ことを期待する、喜びの涙。

［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

七

次の文章を読み、あとの(1)～(3)の問いに答えなさい。

法性寺殿（注1）に会（歌会）ありける時、俊頼（注2）Aまゐりたりけり。兼昌（注3）講師（注4）にて歌よみ上ぐるに、俊頼の歌に名を書かざりければ、見合はせて、うちしはぶきて（せきばらいをして）、「B御名はいかに」と忍びやかにいひけるを、「ただよみ給へ」といはれければ、よみける歌に、

卯（注5）の花の身の白髪とも見ゆるかな賤（注6）が垣根（わが家の垣根）もとしよりにけり

と書きたりけるを、兼昌下泣きして（忍び泣きして）、しきりにうちうなづきつつ、賞で感じけり。殿聞かせ給ひて（忠通殿もお聞きになって）、召して御覧じて、Cいみじう（たいそう）興ぜさせ給ひけりとぞ。

（「無名抄」より）

（注1）法性寺殿＝藤原忠通。平安後期の摂政・関白・太政大臣。歌人でもある。ここでは、その屋敷のこと。
（注2）俊頼＝源俊頼。平安後期の有名な歌人。
（注3）兼昌＝源兼昌。平安後期の歌人。
（注4）講師＝歌会などで和歌をよみ上げる役。
（注5）卯の花＝ウツギの花。ここでは、その白い花をわが身の白髪になぞらえている。
（注6）賤＝身分の低い者。ここでは謙遜の表現。

(1)　文章中のAまゐりを現代仮名づかいに改め、**全てひらがなで**書きなさい。

(2) 文章中に、B<u>御名はいかに</u>とあるが、この言葉について説明したものとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　和歌に作者の名前が書かれていなかったので、講師がそれとなくおうかがいを立てた。
イ　和歌に名前を書きそびれたので、和歌の作者がどうしたらよいか困って講師に尋ねた。
ウ　和歌の作者名が記されていなかったので、困った講師が目だたぬように作者を戒めた。
エ　和歌の作者の名を聞きそびれたので、歌会の参加者がこっそりとそれを講師に尋ねた。

［　］

(3) 文章中に、C<u>いみじう興ぜさせ給ひけりとぞ</u>とあるが、このことについて述べた次の説明文の［　］に入る言葉を書きなさい。ただし、［Ⅰ］は文章中から**二字**で**抜き出して**書き、［Ⅱ］と［Ⅲ］はそれぞれ**七字以内**で書くこと。

歌会で、講師が披露しようとした歌に名前がなかったが、言われたとおりそのまま歌を披露すると、実はその歌には［Ⅰ］の名がよみ込まれていた。歌の、卯の花が咲く垣根に［Ⅱ］の境地を重ねるというしみじみとした内容に加え、作者名を書かなくても、歌が［Ⅲ］ことで誰の歌かが分かる仕掛けを作った、作者の作歌の巧みさ、歌の心の深さに、講師のみならず、あるじの殿も、とても感激したということ。

Ⅰ［　　］
Ⅱ［　　　　　　　］
Ⅲ［　　　　　　　］

八

下の文章は、生徒と先生の会話の一部です。これを読み、次の〈条件〉にしたがい、〈注意事項〉を守って、あなたの考えを書きなさい。

〈条件〉

① **二段落構成**とし、**十行以内**で書くこと。

② 前段では、「巨人の肩の上に立つ」というたとえがどのようなことを言い表しているか、先生の言葉を参考にしながら、あなたの考えを書くこと。

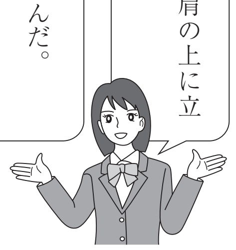
③ 後段では、前段であなたが理解したことをこれからの生活にどう生かしたいか、あなたの考えを書くこと。

〈注意事項〉

① 氏名や題名は書かないこと。

② 原稿用紙の適切な使い方にしたがって書くこと。
ただし、～～や＝＝などの記号を用いた訂正はしないこと。

先生。学級通信の見出しになった「巨人の肩の上に立つ」って、何のことですか。



昔の人が、学問について言い表したたとえなんだ。

偉大な科学者、ニュートンが、自分が偉大な発見をなしとげることができた理由として、「私がより遠くまで見渡せたとすれば、それは巨人の肩の上に立っていたからです。」とそのたとえを引用して答えたそうだ。

明治時代の教育者、福沢諭吉は「学問のすすめ」という書物の中で、同様のことを述べているよ。

「親から譲り受けた遺産は土地や家財であって、いつか跡形もなくなってしまう。けれども、文明の遺産はそうではない。世界中の古人を一人の人間として見れば、その一人の古人が全人類すべての人々に譲ってくれた遺産ともいえるのだ。」

私たちは、なぜ過去のことを学ぶのだろうね。君たちももうすぐ高校生。歴史や古典など、昔のことも含めて幅広く学ぶことになる君たちへの期待をこめて、あの言葉を書いたんだ。

〈*Note*〉

二〇一九年度

千葉県公立高校入試問題（前期）

一

解答

(1) ㋑・㋔　(2) エ　(3) ア　(4) ウ

解説

聞き取るポイントをおさえられるよう、メモを取りながら聞くようにする。

二

解答

(1) はず(む)　(2) わ(く)　(3) くじょ　(4) とうしゅう

三

解答

(1) 編(んで)　(2) 退(いて)　(3) 沿革　(4) 支障　(5) 起死回生

四

解答

(1) ③　(2) 読まれて　(3) 少年易クレ老イ学難シレ成リ、一寸ノ光陰不レ可レ軽ンズカラ。　(4) エ

解説

(1) 「学校に」という場所が、「いる」という動詞を修飾している、修飾・被修飾の関係。他は、下の文節が上の文節に意味を添える補助の関係。

(2) 「読む」の尊敬語には「お読みになる」もあるが、「お読みになって」は二文節なので条件に合わない。

(3) 一字戻って読む場合には「レ点」を用いる。

(4)「木へん」が一画、省略されている。

五

解答

(1) A、イ　B、オ　(2) 何を考えていたか　(3) エ　(4) 切実なこころのありよう　(5) 呼吸における吸うことと吐くことのように一つの行為の二つの側面である。(34字)(同意可)　(6) エ

解説

(1) A、「歌を『詠む』とき人は…書き記します」とあることに着目する。B、「その言葉を口に出して『誦む』こともできる」から考える。

(2) 前で、「書くことをおすすめするのは、書くことによって人ははじめて…知ることが少なくないからです」と述べている。

(3) 人が「うまい」と感じる文章は、「誰かが書いたものに似て」おり、「誰かが代わりに書ける」ようなもの。筆者が「私たちがつむがなくてはならない」と考える文章は、「今…自分にしか書くことのできない何か」であることをおさえる。

(4) 書くことによって人は「自分が何を考えていたか」を知ることができるので、特に心のありようを直かに感じられる詩を書く行為について、「詩はうまく書こうとさえしなければ…読む人のこころを動かす」と述べていることに着目する。

(5) 「詩を読む、これは空気を吸うこと」「詩を書く、これは吐くこと」と、呼吸と対応させているところや、前で「二つの別々の行為であるよりも…行為の二つの側面なのではないでしょうか」と述べているところに着目する。

(6) はじめに「『よむ』という言葉には、三つの漢字を当てることができます」と説明したことを詩にあてはめ、「詩を読む」「詩を書く」「これを繰り返しながら、ときに…声に出して読む」と、「詩の世界の感じられ方は…まるで変わったもの」になると最後に述べている。

六

解答

(1) イ　(2) ア　(3) ウ　(4) 自分の名前　(5) Ⅰ、イ　Ⅱ、うっとりとした顔つき　(6) 養生なつめによってお客さまが健やかになる（20字）（同意可）

解説

(1) なつめの「旦那さんはおかみさんのために、このお菓子を作ったのですよね」という発言に対する久兵衛の反応。なつめが久兵衛の気持ちを「久兵衛は絶対にそうは言わないだろうし…それに違いない」「いつも家を守ってくれる…女房をいたわるために」「ふだんはあまり顔にも言葉でも…菓子を作り上げたのだ」と考えていることに着目する。

(2) 「この実は、なつめが…安吉、お前はどうだ?」と言ったことから考える。

(3) 久兵衛の「菓銘はふつう作り手がつけるものだ」という発言や、なつめが「菓銘にそんな重々しい意味があったとは知らなかった」とおどろき、「今改めて久兵衛から…恥ずかしさが込み上げてくる」と感じていることに着目する。

(4) 「養生なつめ」という提案した菓銘に入っている言葉によって、「少し照れくさい」となつめが感じていることから考える。

(5) Ⅰ、「養生なつめ」という菓銘を聞いた時、「悪くねえ!」と思ったことをすぐに叫んでいることから考える。Ⅱ、「棗の実で作った煉り切り」を試食している場面で、安吉が「感慨深そうな様子で…味わっている」ことに着目する。

(6) おまさが「本当にぴったりの名前ですねえ」「あたしだけでなく…こんなにいいことはありませんよ」と言ったことに注目。

七

解答

(1) まいり　(2) ア　(3) Ⅰ、俊頼　Ⅱ、自らの老い（同意可）　Ⅲ、よみ上げられる（同意可）

解説

(1) 「ゐ」は「い」にする。

(2) 「俊頼の歌に名を書かざりければ」という状態で、兼昌が俊頼と顔を見合わせて、「忍びやかに」名前を書いていないことについてたずねていることから考える。

(3) Ⅰ、「卯の花の…」の歌に「よみ込まれている」名前をおさえる。Ⅱ、卯の花を「わが身の白髪になぞらえている」ことに着目する。Ⅲ、「ただよみ給へ」と言われたとおりに講師が歌を披露すると、「誰の歌かが分かる仕掛け」だったことから考える。

口語訳

法性寺殿で歌会があった時、源俊頼が参上した。源兼昌が講師で和歌をよみ上げた時に、俊頼が歌に名前を書かなかったので、（兼昌は俊頼と）顔を見合わせて、せきばらいをして、「お名前はどうしたのですか」とひそかに言うと、「ただ歌をお読みください」と言ったので、よんだ歌に、

　卯の花は私の白髪とも見えるなあ。わが家の垣根も年寄りになったのだ。

と書いていたのを、兼昌は忍び泣きして、しきりにうなずいて、ほめて感心した。忠通殿もお聞きになって、この歌を手に取ってごらんになって、たいそう感激なさったということだ。

八

解答

(例)

　「巨人の肩の上に立つ」とは、私たちが、人類が長い年月をかけて築き上げてきた偉大な文明の遺産を譲り受けた立場にいる、ということだと思う。

　過去を学び、その学びを次の世代へと受け継いでいくことは、今を生きる私たちの務めだと思う。私は今後、過去のことを含めて多くを学び、自分にできることを考えたい。そ

して、自分の夢を実現させることで、社会が
より発展するための貢献をしていきたい。